異文化に触れて（学校教育編）

渡辺正之
（19-1、タンザニア、理数科教師、栃木県立学悠館高等学校）

みなさんこんにちは。栃木県の学悠館高校から参りました渡辺と申します。私は、理数科教師という立場でタンザニアに派遣されました。実は村に派遣されまして、村にあるちっぽけな学校に配属されました。本当は村での生活をお話できればすごく楽しい話になっていいのかなと思いますが、今日は先生方対象ということで、学校の現状を、多少ショッキングな話も出てくるかもしれませんが、学校生活を中心に話をさせていただきたいと思います。

先ず、タンザニアですが、私も行くまで場所がわからなかったのですが、アフリカにあるのだろうくらいは知っていました。地図では緑のところですね、タンザニア。ざっとタンザニアをご紹介しますと、首都はドドマです。一番大きな町がダルエスサラームという町なのですが、ここは首都ではなくて、最大の町です。面積は日本の2.5倍、人口は日本の3分の1ということなので、人口密度が低いです。部族がかなり多くて130あります。有名どころだと、マサイ族でしょうか。私の任地の近くだとヤオ族とかマコンデ族とか、まあいろいろいますが、そういう部族が130あります。宗教はイスラム教、キリスト教、その他です。その他というのは、伝統宗教ですね。山奥に行くと今でも、お祈りで病気を治すなどそういう怪しげな宗教が残っているのですが、仏教とか神道とかはまったく知られていません。言葉はスワヒリ語です。英語が公用語となっておりまして、学校では英語で授業することになっているのですが、実際は英語が通じないですね。ケニアとか、ザンビアとかタンザニアの周囲の国では結構英語が通じるのですが、タンザニアはスワヒリ語が定着しているという特性もあってか、余り英語が通じません。気候は乾季と雨季。今ちょうど雨季ですね。そんなにジメジメとはしてなく、スコールがたまにザーッと降ります。通貨はタンザニアシリング。物価はとても安いです。日本のだいたい5分の1から3分の1でしょうか。以上タンザニアを簡単に紹介しました。

これが見づらい地図なのですがタンザニアの地図です。黄色い四角で囲まれているのは、先ほどお話しましたダルエスサラームです。タンザニア最大の町ですね。ただ首都は真ん中のドドマというところです。で、最大の町ダルエスサラームから飛行機で１時間かけて、黄色の四角のムトワラという南東部最大の町に行って、そこからバスで5〜6時間かけて、マサシというところに行って、そのマサシにあるチググ村というところにある学校に配属されました。今日はそのチググ村の様子はお話できないのですが、その田舎で、約2年間生活しました。私の活動についてお話しする前に、まずタンザニアの教育制度について、お話したいと思います。このピラミッドがタンザニアの教育システムを表しているのですが、

Primary school、小学校が一番下ですね。Secondary Olevel 、これが日本で言うと中学校に当たります。Secondary Alevel 、これが高校ですね。Advance diploma というのがよくわからないのですが、その上に大学というこのようなピラミッド状になっています。私が赴任したのはSecondary Olevel 、青くなっているところで、日本で言うと中学校に配属されました。ただ中学校といっても、年齢は、むこうは留年制度があるので、17～20才くらいの子もいたりして、年齢的には高校生もしくは、高校生以上の生徒が少なからずいました。教授言語は、実際に授業で使う言語は英語ということになっているのですが、実際はスワヒリ語を多用しています。というのは、特にFORMⅠ、Ⅱでは英語が通じないからです。私の赴任した中学校は4年制でした。1年生から4年生までで、3年生、4年生になると少し英語がわかるようになってくるのですが、1年生、2年生は全く英語がわからないのですね。だからスワヒリ語を取り入れながら授業を進めていました。必修科目はほとんど日本と同じような科目を勉強します。ただ宗教という科目がありまして、宗教の時間になると、イスラムとキリストに分かれて、それぞれ宗教の勉強をします。国家試験、ナショナルイグザムというのがあるのですが、これがですね、小学校のころからありまして、これに合格しないと進級、卒業ができません。このナショナルイグザムが一番やっかいですね。おそらくアフリカに行かれる方もいらっしゃると思うのですが、きっと耳にすると思います。タンザニアだけではなくて、他の近隣の国でも、このナショナルイグザムをやっていたようなのですが、数学と物理で8～9割がFです。Fというのは落第点なのですが、とにかく100人いたら90人は点数が取れないのです。だから理数教師の派遣要請が来ているのだと思うのですが、惨憺たる状況です。

これが私の赴任したムベンバセカンダリースクールという学校です。空がとてもきれいです。これは乾季の映像ですが、アフリカの乾季は毎日こんな空ですね。とてもきれいでした。比較的新しい学校で、今年で5～6年目くらいです。ただ以前小学校として使っていた校舎を使っているので、校舎自体は新しくなくて、中はボロボロなのですが、できて5年目の学校です。生徒数が352名、そんなに大きな学校ではありません。教員数は4名です。私を含めて4名です。ですので、私が帰った後は3名で、もう学校は回りませんよね。やはり教員数が足りないというのは一番大きな問題でして、理数科教師が派遣されていますが、それでも全然十分じゃないという状況です。

生徒の学校生活の様子です。7時から学校清掃となっていますが、7時に行っても誰もいませんでした。朝の集会は日本と同じような集会をやります。気をつけ、回れ右とかそういうのもあるのですよ。校歌も歌ったりするのですが、長い校長先生のお話があって、だいたい１時間目が8時から始まるのは稀ですね。

これが授業風景です。左上の写真をご覧いただけるとわかると思うのですが、とにかく机といすが足りません。これは途上国だったらどこでも同じような状況だと思います。ただ私の学校は比較的恵まれていまして、校長先生がとても教育熱心で力のある方だったのですね。ですから、これでも机といすがあるほうなのです。学校によっては床で書いたり、

次にお話される山田先生の行かれたウガンダはもっとすごいと思うのですが、とにかく物がなくて、そういったところで生徒は頑張っているということです。これは土曜日に課題をやっていたのですが、そのときの様子です。ムービーもお見せできればよかったのですが、ちょっと手違いというか、時間の関係もありますので省略します。

数学指導における課題と対策ということで、課題は山積みです。たぶんここにいらっしゃる方は理数科教師の方だと思うのですが、タンザニアに限らず、アフリカに限らず、途上国共通の課題だと思うのですが、基礎計算力の向上が課題です。計算力がないのですね、とにかく掛け算ができない。中学生でもです。なぜかというと、教わってないというか、小学校の時に授業をやってもらっていないのです。ではどうしたかというと、簡単な計算の反復練習ということで、100マス計算をお聞きになったことがあるかと思うのですが、100マス計算なんかやらせたらそれだけで20分とか30分とかかかっちゃいます。ですので、それを小さくして、ますを、36マスとか25マスにして、そういうのを授業の時に取り組ませて、反復練習をさせていました。応用力の養成です。暗記中心ではなく過程を重視する授業と書いてありますが、これは無理でした。数学が嫌いな生徒は一杯いました。というか、ほとんどが数学嫌いです。なんで嫌いなっちゃったかというと、できないからです。解けない、できないからです。確かにそうですよね、掛け算、九九ができない。正負の足し算、引き算ができない。そういう生徒が、ベクトルとか行列の計算なんて、できるわけがないのです。嫌いになっちゃうのは当たり前なのです。そこで、そういう生徒に対して簡単な問題を解かせて自信を持たせる。そこから始めないといけないな、と思って取り組んでいました。

次にナショナルイグザム対策です。これが本当に厄介だったのですが、とにかく授業だけでは対応できませんので、課外授業を土曜日、放課後と行いまして、何とか、力をつけさせようとしていたのですが、なかなか難しかったです。それからおそらく皆さんも行かれて、最初の頃は問題なくいくと思うのですが、だんだん生徒との関係に慣れてくると、生徒たちが、日本と一緒ですが、授業中に勉強しなくなります。よくコマーシャルで勉強したくてもできないみたいな映像が映ります。たしかにそういうことも多いのですが、いざ学校に来て見ると、やっぱり勉強はつまらないから授業が騒がしくなってしまうこともあります。そこは、現職や大学卒業してすぐに協力隊に参加した人に関わらずほとんどの隊員が悩むことなのですが、とにかくノートを持ってこない。ノートをとらない。授業中おしゃべりをする。授業に遅れてくる。練習をやらない。トイレによく行く。そしてトイレに行ったままどっか消えちゃうのですね。トイレはそんなに遠くはないのですが。私が授業を開始してから半年後にはこういう状況になってしまいました。日本でも大変な学校に何年か勤めていたので、そこはへっちゃらだったのですが、ではどうやってそういう状況を改善したかということなのですが、対策としては簡単な授業中のルールを作って、それを繰り返し生徒に言い聞かせるという方法しかちょっと思い浮かばなかったので、それを繰り返しました。それと、あとは生徒との信頼関係の樹立ですよね。これは日本の学校

でも同じだと思うのですが、とにかくコミュニケーションを授業中以外にもとるようにして、一人でも多くの生徒の名前を覚えるなど、信頼関係を作る。そうすると、時間はかかりますが、少しずつ言うことを聞いてくれるようになると思います。それはたぶん先生方よくご存知だと思います。実は学校では、これ言っちゃいけないかもしれないですが、先生はムチで、体罰しているのです。隊員の中でムチを使って体罰をしたという方もいるようなのですが、私はしませんでした、もちろん。日本では禁止されていますからね。でも、そこまでやらないと授業を成立させるのが難しいという現状があるというのが実際のところです。

クラブ活動もありました。うちの学校の場合、毎週一回だったのですが、バレーボール、サッカー、ネットボールとかやっていました。サッカーの写真を見てもらうと裸足で走り回ってます。よくケガをしないなと感心して見ていたのですが、このような環境でやっています。

ディベートなんてものがあって、向こうの人は話すのが好きです。私は得意じゃありませんが、人前で発表するのもむこうの人は大好きです。授業中などに質問すると、生徒が手を挙げて、前に出てくるのです。前に出てきて説明するのですが、トンチンカンな説明して、全然わからないのですが、みんな笑って、また次のやつが出てきて、またトンチンカンな説明をして、それを何回も繰り返します。目立ちたがりなのかどうかわからないですが。

自主学習なんていうクラブ活動もありました。これは学校によっていろいろあると思います。たぶんディベートは、特にアフリカに行かれる人は目にする機会があるのではないかと思います。

このクラブ活動にも問題は山積みです。グラウンドがまずないのです。グラウンドは小学校を借りてやっていたのですが、ボールがない。指導者がいない。講堂がない。ディベートをやるのに外でやっていますから、雨季で雨がバーっと振ったら逃げ場がないのです。みんなバーっと逃げていって、そのまま戻ってこない。教科書、問題集がない。学校に教科書がありましたが30冊だけでした。30冊をテスト前に貸し出して、3人か4人くらい組みになって、使えというように渡すのですが、ちゃんとチェックしないと戻ってきませんから、その辺はしっかりやりました。そして、極めつけは教員が来ないことですね。学校に来ないこともあります。

Teacher’s on duty 週番をやってくれっていうように要請に書いてあって、皆さんも依頼されることがあるかもしれません。わたしもなにかのためになるかなと思ってやってみたのですが、清掃監督とか集会指導、構内巡回などです。構内巡回って言うのは生徒が森の中に逃げていくのを引き止めるのです。出席管理、体罰もありますが、体罰は右下の写真に写っている木の枝のムチでバチバチ打つのです。生徒が泣き叫んでも、やめない。それで不思議なことに、これが法律でも認められていて、4回までストロークをやっていいという法律があります。その4回という根拠がわからないのですが。しかも4回どころじゃな

いです。私も何でそんなに体罰するのだって聞くと、タンザニアの生徒は悪いからねって一言で片付けられました。その他の雑用もあります。

タンザニア教育の諸問題についてです。これはうちの学校に限らず、私が感じた問題点です。いろいろな隊員からも聞いて、おそらく、アフリカ、もしかすると途上国全般の共通問題なんじゃないかなと思います。まず教員、有資格教員の不足です。そして専門的知識の低さ。平気で間違ったことを教えてしまう。それをどうやって指摘するかが難しいのです。どうしてかというと、プライドがありますから、間違っても生徒の前でそれ違うよと言わない方がいいです。先生もすねちゃいますから。それを別の時間とかに、「良い教え方していましたね。でもここはこうやったほうが良いのではない？」という風に指摘したほうがいいかもしれません。

授業に行かないと赤で書きましたが、本当に授業に行かないのです。時間割はあるのですが、職員室でお茶を飲んでいたり、お話していたり、全然授業に行きません。週に3回くらい授業に行けばいいというような、もちろんすべての学校ではありません。うちの学校の先生です。何でそんなに授業に行かないのだって言うと、生徒が自習しているから大丈夫だと言うのです。自習なんてしていないのです、寝ていたりしゃべったりしています。それで体罰ばかりするのですが、逆に私が一生懸命時間割どおり授業に行っていたら、なんでそんなに授業に行くのだって聞かれました。

生徒は明るく、素直で人懐っこいがモラルが低い。モラルは低いです。平気でガム、アメを授業中に食べます。日本でも一緒かもしれませんが、ひどいのはマンゴーを普通に授業で食べている。お前何食べているのだって聞くと、マンゴーです。でも、注意すると素直に聞いてくれるので、ストレスは溜まらないです。授業は大好きです。他の先生が授業に来てくれないから、私が授業に行くと、ＷＥＬＣＯＭＥです。歩いている途中から2～3人寄ってきて、私のノートとか教科書とか持って、教室に手を引くように入れてくれるのですが、30分くらい授業を続けるともうダメです、飽きちゃいます。それでクラスルールが必要になったのです。そして欠席、退学が多い。退学はお金とか病気とか、妊娠が理由です。アフリカ諸国ではおそらく妊娠がかなり多いとは思うのですが、それで退学していく生徒も多いです。

体罰についてです。先ほど申し上げましたが、これが一番の問題です。実際見ると、正直心が痛いというか、何とか助けてあげたいとは思うのですが、彼らに体罰を止めさせるのはなかなか難しいです。今までそれで生徒指導をしてきましたから、彼らにはそれしか手段がないのです。生徒と話をしてどうこうっていうのはそういうスキルはないですから、その体罰を先生から取り上げちゃうと、おそらく、学校が成り立たたなくなっちゃう恐れもあるのかなと思います。

学校運営についてです。とにかく一言で言えばテキトーです。教育環境、これはそうですね、テキトーという一言につきるかなと思います。

最後にタンザニアで感じたことを簡単にお話して終わりたいと思います。こっちが笑え

ば、向こうも笑う。これは今日の発表のキーワードというかテーマみたいなところに書いたのですが、この一言かなという感じがします。やはり異文化に行って、受け入れてもらえるのか不安ですよね、2年間住むわけですから。受け入れてもらえるためにはどうしたらいいかなってやはり考えると思うのですが、その一番の秘訣は、おそらくこっちが先に相手の異文化に溶け込む努力をすることだと思うのです。隊員の方でもやはりいるのですね、タンザニアに行って、オレは日本人だからタンザニアの文化には合わせない。やつらはダメだ。タンザニアはダメな国だと。もうそればかり言っていて、会うたびにタンザニア人の愚痴、それから文句です。何しにこの人は協力隊に来たのだろうと思っちゃう人も中にはいるのですが、そんな事をしていたら、受け入れてもらえないのです。相手を受け入れようとする、そういう姿勢がこっちを受け入れてもらう一番簡単な方法なのかなと思います。向こうの人たちの生活を見ていると、助け合いながら生きているなというのがわかります。貧しくても与え合っている。繋がりがあるのです。近所の繋がり、家族の繋がりです。最初に話したとおり、村に入ったのですが、村人が本当に、毎日声をかけてくれて、家族同然に扱ってくれて、幸せでした。帰ってきたら何でこんなに孤独なんだろう、そういう感じになったりします。日本人って孤独なのかな、いや、皆さんは孤独じゃないと思うのですが、タンザニア人に比べると繋がりが希薄なのかなという気が今でもしています。いじめのない学校、けんかとか言い争いとか、からかいとかは普通にありますよね、人間ですから。でも、クラスみんなであの子を無視しようとかわけのわからないいじめは見たことも聞いたこともありませんでした。

いろいろ考えると、タンザニア人と日本人はどちらが幸せなのでしょうか。私もこういう話を何回か学校でして、この言葉を生徒に投げかけていつも話を終わります。日本の素晴らしさ、これ私の学校です。学悠館高校、栃木県の初めての単位制高校ということで、県税６０億かけて造られました、まだ5年目なのですが、うちの学校は環境的にはとても恵まれている。日本人って勤勉だなと思います。歴史的にも、文化的にも、世界的にユニークな面をもっていて、そして日本食は本当においしいと改めて思いました。ぜひみなさん日本食はインスタントでいいので、味噌汁とか、持って行ったほうがいいと思います。

帰国後の活動ということなのですが、何回か学校の方で講演をしたり、JICA さんの報告会で話をさせていただく機会がありました。以上で私の説明は終わりです。

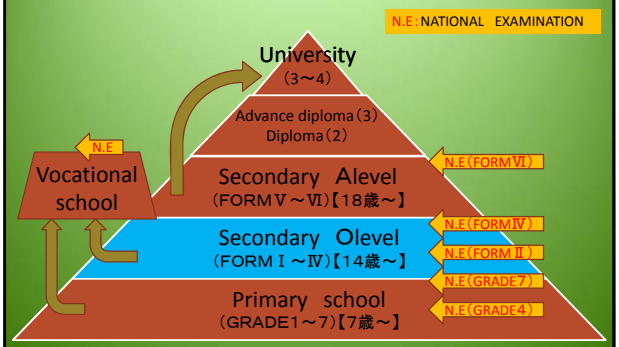
異文化に触れて
（学校教育編）

栃木県立学悠館高等学校
教諭　渡辺　正之
（十九年度一次隊　理数科教師）

タンザニア連合共和国概要

首都：ドドマ
面積：95万km²（日本の2.5倍）
人口：約4000万人（日本の1/3）
部族：約130
宗教：イスラム教・キリスト教・その他
言語：スワヒリ語（国語）、英語（公用語）
気候：乾季（6月～10月）と雨季（11月～5月）
通貨：タンザニアシリング（Tsh）10Tsh≒1円

タンザニアの教育制度



教授言語	• Secondaryから授業は英語 • 実際はスワヒリ語を多用 • 英語が通じない（特にFORMⅠ＆Ⅱ）
必修科目	• 国語（スワヒリ語）、社会（地理、公民、歴史）、数学、理科（物理、化学、生物）、英語、宗教
国家試験 National Examination	• 小学校から国家試験あり • 数学と物理で8～9割が“F”（落第点）

ムベンバセカンダリスクール

学校概要

ムトワラ州マサシ県ムベンバ村に2004年に設立

生徒数352名、教員数4名（2009年3月現在）

生徒の内訳

	クラス数	男子生徒	女子生徒	合計
FORMⅠ	2	41	44	85
FORMⅡ	2	46	40	86
FORMⅢ	3	62	67	129
FORMⅣ	1	42	20	62

生徒の学校生活

日課（月曜～木曜）

7:00～　清掃
7:40～　朝の集会
8:00～　1限～4限
　（1コマ40分休み時間なし）
10:40～　休憩時間
11:10～　5限～12限
　（1コマ40分休み時間なし）
14:30　放課

＊金曜は休憩後に30分程清掃し、12時前には放課

登下校風景

朝の集会

授業風景（通常）

授業風景（土曜課外）

数学指導における課題と対策

① 基礎計算力の向上
→ 簡単な計算の反復練習（36マス計算）

② 応用力の養成
→ 暗記中心ではなく、過程を重視する授業

③ 数学が嫌いな生徒
→ 簡単な問題を解かせ、自信を持たせる

④ NATIONAL　EXAM対策
→ 土曜日の課外授業

クラスコントロールにおける課題と対策

〔課題〕

・ノートを持ってこない　・ノートをとらない

・授業中の私語　・授業に遅れる

・演習をやらない　・トイレによく行く

〔対策〕

・簡単な「授業中のルール」を作り、繰り返し生徒に言い聞かせる

・生徒との信頼関係の樹立

クラブ活動（スポーツ）

- 毎週火曜日16時から
- 近隣の小学校のグラウンドを借用
- 種目はサッカー，バレーボール，ネットボール
- 勉強が苦手な生徒も大活躍

クラブ活動（ディベート）

- 隔週木曜16時から
- 場所は学校の校庭
- 教員顔負けの英会話力を持つ生徒も

議長の挨拶でディベート開始

堂々と演説するプレゼンター

クラブ活動（自主学習）

- 隔週木曜16時から
- 各教室毎に異なる科目を学習
- 先生が居なくとも真面目に勉強

結構真面目にやります

生徒が先生

クラブ活動における問題点

・グラウンドがない（スポーツ）

・ボールが足りない（スポーツ）

・指導者がいない（スポーツ）

・講堂がない（ディベート）

・教科書・問題集がない（自主学習）

・教員が来ない（共通）

タンザニア教育の諸問題

教員
- 有資格教員の不足
- 専門的知識の低さ
- 授業に行かない（給料が低いから？）

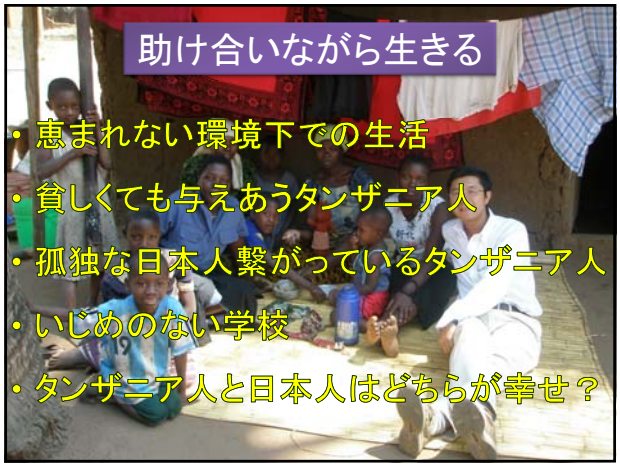
生徒
- 明るく、素直で、人懐こいがモラルは低い
- 授業は好きだがあまり勉強をしない
- 欠席、退学（お金・病気・妊娠etc）が多い

体罰
- 全ての問題を体罰で解決
- 鞭打、膝座、腕立、腕拳、兎跳、肉体労働
- 「タンザニアの生徒は悪いからね」

学校運営
- 杜撰な出席＆成績管理
- 計画通りに動かない学校行事
- あっても無きに等しい時間割

教育環境
- 机・椅子・教室・教科書の不足
- 実験室・図書室・運動場の未整備
- 行きとどかない安全な水と食事

タンザニアで考えたこと



帰国後の活動

- 進路部主催講演会『タンザニアから世界を見る』
- 国際理解教育講演会『タンザニアからのおくりもの』
- 教科『地理B』でのタンザニア紹介（計5時間）
- 人権教育講演会『タンザニアの“いま”』
- 青年海外協力隊説明会（小山市生涯学習センター）
- 学校祭展示企画『KARIBU TANZANIA』